
初恋の雪景色

尾ノ坂 駿介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋の雪景色

【Nコード】

N5146K

【作者名】

尾ノ坂 駿介

【あらすじ】

クリスマス。肌寒く凍るような日ではあったけれど、そこには確かなぬくもりがあった。

(前書き)

前作【紅の夕日坂】の続編です。

「おはよう、翔太。……まだ、眠いのか？」

冬。薄暗く、けれど真っ白な雲に覆われた空があたり一面に広がり、今すぐにでも雪が降りそうな天気が続く十二月下旬。

布団に包まって寝ていた翔太の唇に柔らかいものが軽く触れると同時に、彼の目前に楓の笑顔が目に入った。

「おはよう楓……と言いたところだが、お前、何で俺の家にいる？」

「む、忘れたのか？ 今日クリスマスだから、デートの約束をしていたではないか」

当然だ、と言わんばかりの彼女の瞳は穢れを知らない、純粋な子供のようなだった。

「……ちなみに、今は何時だ？」

「午前五時だ」

すぱんっ。

翔太は、手元にあったノートで楓の頭を一発だけ軽く叩いた。

景気よい音が翔太の部屋を響かせる。叩かれた本人は驚いた様子で翔太の顔を窺っていた。

瞳には若干涙を浮かべ、小動物のように頭を押さえて縮こまっていた。

「俺は昼に待ち合わせしようと、つい先日お前に言っておいたはずだが？」

「だ、だって楽しみにしてたから……」

「限度があるだろ、バカ」

「ばっ、バカとはなんだ失礼な！　こうやって翔太の顔を誰よりも早く見るのが私の役目であって——きゃっ!？」

楓の発する言葉が最後まで終わるよりも早く、翔太は彼女の小さな身体を抱きしめた。

彼女の両の拳は翔太の左肩辺りにすっぽりと収まり、恥ずかしそうに楓は身を動かして彼の顔色を窺う。

透き通る雫のように美しく光る、白く繊細な肌。ビー玉のように色鮮やかな光沢のある瞳。その奥では優しい笑顔を向ける翔太が映っている。

羞恥故に赤く染まりつつも、しっかりと彼の身体を抱きしめ、離そうとしないその身体はどこか小刻みに震えながらも、彼から発せられる言葉を待っていた。

「お前の気持ちは嬉しいよ。すごい嬉しい。でも、逸る気持ちを抑えて、普通に時間通り玄関で待っててくれたら、もっと嬉しかったかな？」

「そ、そうなのか……分かった。努力する」

「うん、そうか。楓は良い子だな」

翔太は抱きしめている腕を解き、楓の髪を優しく撫でてやった。そ

れに対して健気な笑顔を見せる楓だったが、何かに気づいたように、すぐさま声を荒げた。

「そ、そうか。良い子か……えへへ……ってそうじゃなくて！ こ、子供扱いはあるなど前から言っているだろう！ いくら翔太でもそろそろ怒——わぷっ」

翔太は、直ぐ近くにあった布団を一枚楓に被せると、そのままベッドの上に抱き上げるのと同時に、自分もその布団の中へいそいそと入りだした。

ぷはあっ、と布団から顔を出す楓だが、自分の直ぐ近くに翔太の顔がある事に驚き、あたふたと狼狽しながら彼に囁いた。

「しょ、翔太！？ あ、あのそのだな、わ、私はこんなに早くに来たのは別に翔太としたいから来たんじゃないかって……いや別にしたくないわけじゃないんだが……って違う！ そうじゃなくて、その、だからまだ心の準備が……！」

「……何言ってるんだ、お前？」

楓の言葉が今ひとつ理解できていないのか、翔太はぽかんとした表情で彼女を見詰める。

それを見て、翔太と同じように顔をぽかんとさせる楓。そんな彼女の様子を見て翔太は、ああ、そうかと勝手に納得をし、布団を少しずつ上げていった。

布団から少しだけ顔を出した楓の髪を、仔猫をあやすかのように優しく撫でながら翔太は言う。

「……まだ早いから、もう少し寝ようぜって意味だよコレは。どうせお前の事だから、全く寝れてないんだろ？」

「う、うむ……昨日は楽しみで仕方がなくな。朝の一時に寝て四時に起床した。それまでは準備をしていた」

「……三時間しか寝れてねえじゃねーか。楽しみなのは解るが、寝るときは寝ろ。身体壊すぞ」

「あうっ……」

撫でていた髪を額に定めて、翔太は一発楓にデコピンを放つ。唸るように彼を睨みつけていた楓だったが、ふっと肩の力を抜くと、きゅっと彼の身体を抱きしめた。

ぬくもりは小さい頃に一緒に寝ていた母のようで。それでいて大きな身体はいつも自分を守ってくれていた父のようで。

自然と、楓は緊張を解き放ち、ゆっくりと意識を深い眠りの中へ沈ませていく。彼のベッドで。彼のぬくもりをこの身で感じながら、ゆっくりと。

「翔太……」

「ん？」

「……お休み」

瞳を閉じて楓は翔太にキスをした。今度のは少しだけ長く、時間のあるものだった。

触れ合う彼女の唇は雪のように冷たくはあったが、それでも彼女の温かさをひしひしと感ずることは出来た。

◇

朝の寒さも比較的落ち着いた正午。楓と翔太は防寒対策をしっかり整え、最寄の商店街へと来ていた。離れないように、手だけはしっかり握って。

冷たい風が吹き抜けるたびに楓の髪が揺れていく。翔太がそれをそっと撫でて整えてやると、楓が「？」と不思議そうに顔をしかめて彼を見た。

彼女は白と赤が混合したワンピースコートに、肩には少し大きめのバッグをかけている。一見して少しごつそうな印象を与えてしまいがちなそのコートは、翔太と並んで自分も背を高く見せようとする、楓なりの見栄なのかもしれない。翔太はそんな彼女の見栄っぱりなところも好きだった。可愛く、それでいて意地っ張りな様子が。

「さて……本の通りには……うむ。こうだな、こうして、ああやって……そうか、なるほどこの手が……」

「……？」

自分の顎に手を当ててぶつぶつと呟く彼女を見て、翔太が首を傾げる。

何か考え事をしているのだろうか。しかし、それにしてはやけに真剣で、変に声をかけにくい状態ではあるのだが。

「……楓、どうかしたか？」

翔太に呼びかけられて、ふっと我に返る楓。

そのままあたふたとした手振り素振りで彼に言う。

「……あ、いや！ ちょっとな！ どこから町を回ろうか考え込んでいてな！ し、心配せずとも挙動不審ではないぞ！ 私はいたっ

「安全だ！」

自分の事を安全と言ってしまふ事自体、どうなのだろうか。

翔太は困ったような苦笑いをして、彼女を自分の近くまで引き寄せた。彼の大きな身体に寄り添うようにして、楓が「ひゃっ!？」と声を漏らす。

そんな様子にクスリと笑みをこぼし、翔太は言う。

「さ、どこから行く？」

「そ、そうだな……じゃない。そ、そうね……先ずは服を見るのがいいんじゃない……のかな？ 私はそっちのほうがいい……わ……?」

「……？ そ、そうか。それじゃ、服でも見てみるか。ちょうど俺も新しいジャンバー探したかったし」

「そ、そうだろ——ああ、違う違う。……そ、そうでしょう？ それじゃ、早速そこへ行きましょう」

ややぎこちない様子で二人は歩いていく。

少し暗くなった寒空が、真冬の色鮮やかな世界を今だけ支配していた。

◇

「——結構、回ったな」

「そうだな——そ、そうね」

緑生い茂る公園のベンチで、二人はゆっくりと佇んでいた。

手には買い物袋をぶら下げている。服を何着か見て回った後、最寄のファーストフード店へ立ち寄り、一時間程度喋ってからゲームセンターに行き、クレイニングゲームで遊んだり、プリクラを撮ったり……。あまり計画性はないが、それでも二人は楽しい一時を満喫していた。二人きりの時間。大切な二人だけの時間を、その身で確かに堪能していた。

「なあ」

「ん、どうした……の？」

「さっきから気になってたんだけど。どうしたんだ、その口調。なんか変だぞ？」

「そ、そうか……な？ 私は別に変だとは思わないけれど……」

「うん、変だ。いつもみたいにさ、普通に話してくれたっていいぞ。無理してそんな喋り方しても、息苦しいだけだろ。いつもどおり喋ってくればいいよ。お前らしくない」

ぼん、と彼女の肩に手をかけて、翔太はニコリと笑顔を向ける。

そんな彼の様子を見て、楓は小さく息を吐くと、そのままぼつりと言葉を漏らした。

「……私な。いろいろと本を読んで調べてみたんだ。恋人になるって、こういうことか。恋人になったら、何をすればいいのか」

「……恋人に、なったら？」

「本にはな、女の子らしい喋り方をしろだとか、ファッションには気をつけたほうがいいとか、そんなことばかり載っていた。私には無縁な物ばかりが、たくさん載っていた。それから考えたんだ。恋人になるには自分を変えなければいけないのだって。女の子らしく、そして可愛らしくしなければ、恋人として釣り合うことが出来ないんだって。だから、必死になって変えようとしてた。翔太が望む彼女に、翔太に相応しい彼女になれるように、頑張ってた」

彼女の視線は俯いているためか、ずっと自分の膝だけを直視している。

彼と目を合わせる事はなく、独り言のように、ぼつりぼつりと言いつづける楓に、翔太は何を感じ取っただろう。

彼女は、悩んでいる。それも、彼氏である翔太の事で。それも、こんなにも真剣に翔太の事を想い、頭を悩ませている。

やがて彼女はふっと顔を上げると、控えめな笑みを翔太に見せた。悪戯っぽく、けれど少し困ったような表情で。

「人を好きになるって……こんなにも楽しいのだな。楽しいけれど、怖い。もし嫌われてしまったらどうしよう、拒絶されたらどうしようって、そんなことを考えてしまうから。……私はな、翔太のことが好きだ。誰よりも大好きだ。……でも、でも。翔太に釣り合わない彼女にはなりたくない。翔太の自慢の彼女だって他の人に言えることが出来るくらいなの、最高の彼女でありたい。だから……自分を变えようとしてた。自分の悪いところを、直そうとしていた。そうすれば……翔太が、もっと私のことを好きになってくれるんじゃないのかと思って」

楓は顔を俯かせると、再び地面へと視線を落とした。

誰よりも翔太が好きだから、彼が自分の一番であるから。

楓は自分を変えようとしていた。悪い部分を改善して、最高の彼女

になれるように、努力していた。

どれだけの苦労を虐げられただろう。どれだけ恋人とは何かという事を、勉強してきただろう。

全ては彼の為に。全ては大好きな彼氏でもある、翔太の為にしてきたのだ。最高で、最愛の彼女でいられるように。

翔太は何も言わず、楓を自分の近くに引き寄せた。とくとくと心臓の鼓動が加速する中で、こちらをずっと見詰めている楓に向けて、優しく言った。

「……完璧な彼女ってのも、あんまり好きじゃないな。俺はな、お互いの弱い部分を補いあって、支えあって、初めて恋人って言えるんじゃないのかって思ってる。だってさ、人間には誰だって欠点がある。その欠点はその人なりの個性でもあるんだ。だから、それを無理やり直してしまったら、もう自分じゃなくなってしまう。例えば、楓がもし今の口調じゃなくなってしまうたら、それはもう楓じゃない。別の人になってしまうんだよ」

「そう、なのか……？」

「そう。お前じゃなくなる。別の人になってしまう。俺はそんなの嫌だ。楓が楓じゃなくなるのは嫌に決まっている。だから、だからさ……」

だから——そう言って、引き寄せた楓の身体を、翔太はぎゅっと抱きしめた。そのぬくもりは、その抱擁は、本当に彼に愛されている証拠だという事を、楓はひしひしと感じた。

「焦らなくなっている。変えようとしなくなっている。俺はありのままのお前が好きだからさ。何事にも一生懸命で、頭が良くて、でもドジで、口調が男勝りで……そんなところを全部ひっくるめて、

俺は楓という存在を好きになったんだ。お前を嫌いになんかなった
りしないよ。こんなにも俺の事を想って、ひたむきに頑張ってくれ
ている楓を……嫌いになんか、なるはずがない」

恋人の条件とは、果たしてどのようなものだろうか。

翔太は、その意味を深く考えてみた。けれど、それは考えるだけ無
駄だという結論へ、即座に至った。

恋人の条件など、事前から決められているものじゃない。そんなも
のは、自分たちで決めるべきだ。

「翔太……」

楓は抱擁を交わしたまま、ぽつりと彼の名を呼ぶ。おそろおそろだ
けど、しつかり、はつきりと。

「私は……ずっと、お前のそばに居てもいいのだろうか」

震えた声色から、翔太は何を感じ取っただろう。寒さゆえか、それ
とも拒絶か。

そして翔太は自分の思いを伝えた。ある意味では、一生を誓う約束
でもある言葉を、楓に伝えた。

「居てもいい」じゃない。そばに居てくれ。ずっとだ。ずっと……
俺のそばに居てくれ」

肩を抱いて、ゆっくりと翔太は楓の身体を離す。赤く染まる楓の顔
を見て、少し照れ臭くなりながらも、翔太は彼女に口付けを交わし
た。

それを彼女が拒むはずがない。ゆっくりと彼の温かさを感じながら、
瞳を閉じた。

薄暗い夕暮れとともに沈んでいく太陽は今なお眩く光り輝いている。距離はたとえ遠かろうが、その身ははっきりと目に映る。相変わらず風は冷たいけれど、傍に居る楓の温かい手を握っていると、不思議にそれすら感じさせなくなるのだ。

楓もそうだ。翔太という存在が傍にいる限り、たとえば身体は冷たかろうが、心は誰よりも温かいのだ。

――ふと、翔太は何かに気づいて空を見上げた。夕暮れ空はいつの間にか雲に覆われて白く染まり、そこからたくさんの白い結晶が、辺り一面に降り注いでいたのだ。

「雪だ……」

「本当だ……綺麗……」

二人は顔を見合わせると、クスリと笑って立ち上がった。深々と降り続く雪たちもまた、彼らを心から祝福しているのかもしれない。ホワイトクリスマス。偶然と言ってもよいほどのタイミングで降り出した雪を見て、彼らは何を思っただろう。夢みたいなこの光景を見て、どんな気持ちになっただろう。

――出逢えて、良かった。ぽつりと楓が言った言葉が翔太の耳に入ったかは分からない。けれど、翔太もまた同じ事をぽつりと呟いていた。

それが楓の耳に入っただのかなんて、やっぱり分からない。

愛する二人に、限りある祝福を――。

「翔太……」

「……ん？」

「……ずっと、大好きだ」

——
Merry Christmas.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5146k/>

初恋の雪景色

2010年11月12日21時36分発行